

榎えのき

令和7年7月11日発行 校長 久保田 勲

よさをみとり 伝え 互いに支え合う学校風土

本校では、「よさをみとり、伝え、互いに支え合う学校風土」を目指し、日々、子どもたちの成長を支えています。この方針は、一人ひとりの良さに気づき、それを伝えることで、自己肯定感と他者への思いやりを育むことを大切にしています。

一方で、ほめてばかりでは強く生き抜く力が育たないのでは」「自己肯定感が高いと自己中心的になるのでは」というご意見もあるかと思います。そこで今回は、「ほめる教育」がどのように自己肯定感を高め、他者への思いやりを育むかについて、具体例を交えながらお伝えします。

学校の中を歩いていると、ふとした子どもたちの姿に「頑張っているな」「素敵だな」と感じる場合があります。そんなとき、そっと「～がいいね」と声をかけると、驚きながらも嬉しそうな表情が返ってきます。こうした小さな関わりでも、自分のよさを認められる経験は、自己肯定感を育て、まわりの人にも優しくなれる土台となります。

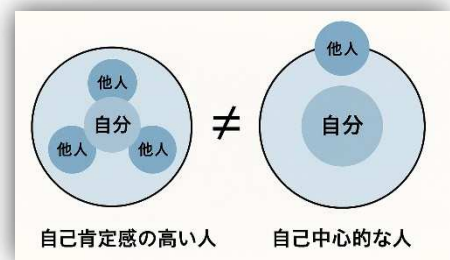
自己肯定感とは、「自分は大切な存在だ」と感じられる気持ちです。これが高まることで、子どもたちは自分に自信をもち、他者を受け入れる心の余裕をもてるようになります。

「甘やかし」と「ほめる教育」 自己肯定感の高い人≠自己中心的な人

ほめる教育と聞くと、何でもかんでも肯定する「甘やかし」をイメージするかもしれません。しかし、私たちが目指すのは、子どもたちが努力し成長した点を的確に見つけ、それを言葉で伝えることです。

例えば、運動会でリレーに挑戦した子どもに対し、「最後までバトンをつなごうと全力で走ったね」と具体的に伝えることで、子どもは自分の行動が評価されたと実感します。具体性に欠け、なんでもいいねと甘やかすことでは決してありません。

自己肯定感が高い子どもは、協調性や社会性が高いと言われています。例えば、友達と協力して課題に取り組む際、自己肯定感が高い子どもは、自分の考えを述べながらも、他者の意見を尊重し、折り合いをつけながら、合意を目指そうとします。これが自分のことだけを考えて行動する自己中心的な姿勢では、対立のままで終わってしまいます。互いの良さを認め、支え合いながら育った経験は、大人になってから職場や家庭で良好な人間関係を築く基盤となります。 (「対立と合意」については前号を参照してください。)



学校と家庭が一体となり…

子どもたちが自分自身を信じ、互いを尊重する心を育むには、私たち大人が日々の中で彼らの「よさ」を見取り、それを伝えることが欠かせません。学校と家庭が一体となり、子どもたちの成長を支えることが、未来の社会を担う力強い人材を育む一歩となると信じています。



学校 HP